

研究の方法、研究の意義を求めつつ

— 『嵐が丘』、『メアリ・バートン』、『ハムレット』を中心に —

東 郷 秀 光

1 はじめに

演題は「研究の方法」ですが、この「方法」は漠とした意味で考えております。ここでは文芸理論とか文学批評のあり方を論じるのではなくて、例えば「自分には研究の方法などない」と言う場合には、方法がないと言うのが「方法」である、と考えることにします。テリィ・イーグルトンは『文学理論』の序文の中で、理論に対して敵意を抱く場合はほかの人々の理論に敵対することを意味するのであって、自分自身の理論は忘れ去っているのである、と言っています。どういう読み方をするにせよ、文学作品を読む場合にはなにか「理論」とか方法と言うべきものがあることは事実です。ここでは具体的に文学作品を検討することから始めて、そこからなにかを言おうというやり方で進みます。

なお与えられた時間が1時間なのに3つの作品に触れるのは無謀なことに見えますが、今日の話は3つの作品がないと纏まらない構造になっております。話は駆け足になりますが、どうかお許しを願います。

2 作品への問いかけ

イ) 『嵐が丘』について

『嵐が丘』は全34章のうち30章（全体の88%）をネリィ・ディーンが語る構造になっております。そしてネリィがヒースクリフについて語る場合には、公平・中立とは言いがたいことに読者は気がつきます。これは私だけが言うのではなくて、例えばF.R. グッドリッジは「語り手ネリィ」(*Critics on Charlotte and Emily Brontë* Florida 1968 所収)の中で重要な指摘をおこない、この語り方は読者にネリィの判断を疑問視させる役割を果たしていると言っています。

『嵐が丘』の早くも第4章でロックウッドがネリィ・ディーンに、ヒースクリフはどうしてスラッシュクロス屋敷を人に貸して、ずっと酷い所の住居に住んでい

るのか、と尋ねます。するとネリィは、ヒースクリフは金持ちで、スラッシュクロススラッシュクロスの屋敷よりもずっと立派な家に住めるのですが、けちん坊なので、スラッシュクロススラッシュクロスの屋敷に移り住もうとしているときでも金払いのよい借家人があると聞くと、数百ポンドを手に入れる機会を逃すのは我慢が出来ないので、と語ります。

すでにこのあたりから読者はネリィのヒースクリフについての語り方に注意すべきだと思い始めます。当然ながらネリィにしてみればヒースクリフはアーンショウの旦那様に拾われてきてお世話になったのに、嵐が丘の新しい主人ヒンドレイヒンドレイに手向かい、嵐が丘の屋敷まで奪ったことが許せないのです。ネリィはヒースクリフが成人してから取った行動を知っていますから、ロックウッドロックウッドに話るときは、すでに子どもの頃からヒースクリフは陰険な子だったと解釈しています。

しかしネリィの解釈から離れて読者がヒースクリフの姿を再構成してみるとどうなりましょうか。ヒースクリフはヒンドレイからの虐待をおとなしく耐えればよかったのだと考えるべきなのでしょうか。『嵐が丘』ではヒースクリフに読者が共感できるかどうかがこの作品を解釈する分かれ目だと思います。これはヒースクリフの行動全てを容認することとは別です。ヒースクリフが後にどうしてああいう非情で冷酷な行動に出るようになったかを理解できるかどうかという問題です。

ネリィは第8章でヒンドレイのヒースクリフに対する扱いは天使をも悪魔に変えてしまうほどだったと語ります。こういう状況の中でヒースクリフとキャサリンは深く結びついてゆきますが、やがて決定的な瞬間が訪れます。キャサリンがエドガー・リントンからの結婚の申し込みを受け入れたときのことです。

キャサリンはエドガーからの結婚申し込みを受け入れたものの、不安な気持ちが残っています。実はこの結婚承諾はキャサリンにとっては大きな矛盾を抱えたものでした。キャサリンのヒースクリフとの心の結びつきは切り離しがたいものであるのに、現実の結婚となると2人が結ばれることはひどく困難なのです。ヒースクリフは氏・素性の定かでない孤児、拾われ子です。財産も教養もありません。もしヒースクリフと結婚したら2人の社会的な地位は落ち、乞食になってしまうとキャサリンが語ることは嘘ではありません。

結婚するか否かに関係なくヒースクリフと深く結びついていることを信じているキャサリンは、ヒースクリフは地下の変わらない岩のようなものだ、見えない

けれども喜びの源で、なくてはならぬものだ、自分こそヒースクリフだと叫びます。そして結婚はエドガーとして、ヒースクリフの出世を手助けし、ヒンドレイの虐待から守ってやるのだ(第9章)と言って、自分を欺きその行動を正当化しようとしています。

キャサリンの語る言葉を途中まで聴いたヒースクリフは嵐が丘を飛び出して、3年してある程度の金もあり、教養も備えた逞しい青年になって帰ってきます。それからヒースクリフの復讐が始まります。ヒースクリフはエドガーをキャサリンが結婚相手として選んだ理由を見抜いています。ヒースクリフにはなくて、エドガーにあるもの、つまり財産、地位をヒンドレイから、そして教育の機会をその息子のヘヤトンから奪ってゆきます。これを計画的に意図的に行うものですから読者の目にはその冷酷、残忍さが際立って明白になります。

しかし復讐に全力を注いでゆくヒースクリフには予期しなかった事態が待っています。第33章では、計画が実現するかと思われた直前に彼は自分の行ってきた復讐が虚しかったことを悟るのです。「あわれな結論ではなからうか、家を2軒壊せるだけの梃子と大槌を手に入れたというのに、全てが整いわが手にあるというのに、その気持ちが消えてしまったのだ」とヒースクリフは語ります。

ヒースクリフはキャサリンが自分を選ばずにエドガーと結婚したその理由が財産、身分、教養などにあることを知り、自分が財産、身分、教養などを身につけることで、復讐し対抗する決心をしました。しかしヒースクリフは主として2つの理由から敗れてゆきます。その1つは復讐のもつ奇妙な論理のためです。復讐とはヒースクリフが憎み抜いた方法を、今度は相手に適用して苦しめることだからです。ヒースクリフはヒンドレイから財産を奪い、その息子のヘヤトンから教育の機会を奪い、エドガーの妹イザベラを虐待し、エドガーとキャサリンとの娘であるキャシーを冷酷に扱います。しかしこの行為はかつて自分が全身で憎んだ行為を自分が同じく繰り返していることだと気がつくのです。この事実が気がつき、認めることはヒースクリフの人間的な誠実さの証しです。ここが大切な点だと思います。

もう1つはヒースクリフが憎んでいるヒンドレイの息子ヘヤトンを心ならずも愛したことです。無教養に育てられたヘヤトンとキャシーとの間に愛情が育っているのをヒースクリフは目にします。復讐の手段としてヘヤトンから教育の機会

を奪い、野良仕事をする無教養な青年に仕立てたのですが、ヘヤトンがキャサリンの面影をとどめ、またヘヤトンのなかにヒースクリフは若い頃の自分の姿を重ねて見るようになってくるのです。ここにも読者はヒースクリフの人間としての優れた資質を認めないわけにはゆきません。結果としてヒースクリフが自滅にちかい死に方をして嵐が丘から消えてゆくのです。

さて、ここで批評家たちが『嵐が丘』をどのように解釈しているかを見てみましょう。ここは今日の話の大切な点です。S. モームはその著書 (*Ten Novels and Their Authors* Harmondsworth 1969) の中で、『嵐が丘』について「もしヒースクリフとキャサリンが恋に身を焦がしていたというならどうして貧乏を覚悟して駆け落ちしなかったのだろうか」と語っています。しかしモームは 19 世紀のイギリスで結婚を成りたせている条件から、結婚したら 2 人はヒースクリフの身分になり下がり乞食同様になるしかなく、これにキャサリンは耐えられなかったことが理解できないのであろうか。結婚に集中的にみられる当時の価値観を考慮しないと『嵐が丘』は正當に評価できないのではないのでしょうか。

また Q.D. リーヴィスはその著『『嵐が丘』考察の新しい方法』(*Lectures in America* London 1969 所収) の中で、『嵐が丘』では娘キャシーが結婚するまでに成長できる姿を描くことで母親キャサリンが批判されていると指摘しています。

Q.D. リーヴィスの論の特徴はヒースクリフの恨み、そこから生じる復讐とその挫折にまったく触れていないことにあります。もし『嵐が丘』からヒースクリフとキャサリンとの愛、結婚に伴う矛盾、ヒースクリフの復讐とその挫折を除外したら、作品の持つ感銘はおおかた消えてしまうのではないのでしょうか。

ここで私は S. モームや Q.D. リーヴィスの作品解釈が間違っていて、私の読みが正しいなどと主張する積もりはありませんし、その必要もありません。ここで言うべきことは作品は問いかけのあり方によって、引き出される答えが異なるのであり、豊かな問いかけが豊かな答えを引き出すのだ、文学作品を評価するとは先ずいかに豊かな問いかけを発するかではある、ということです。研究方法というとき、文学作品に何を問うかがその一部ではないのでしょうか。

ロ) 『メアリ・バートン』

マーガレット・ガンツはその著 (*ELIZABETH GASKELL : THE ARTIST IN*

CONFLICT New York 1969)の中で、『メアリ・バートン』には小説2つ分の材料が含まれている指摘しています。これは作品の題名として作者は『ジョン・バートン』としたかったが、出版社の強い要望により『メアリ・バートン』に変更されたという経緯からも頷けることです。

作者エリザベス・ギaskellはその手紙(42 *THE LETTERS OF MRS. GASKELL* Edited by J.A.V. Chapple and A. Pollard Manchester Univ. Press 1966)の中で、「ジョン・バートンの人物を中心としてほかの全ての人物が形成されたのです、ジョンこそ私の主人公であり、私の全ての共感が与えられる人物です」と語っています。『メアリ・バートン』ではメアリが作品の最初から最後まで登場するという点では主人公と言えないこともないが、ジョンが見聞し、体験する労働者たちの悲惨な生活、社会に対する疑問や憤りなどは読者には伝わるもののメアリの視野には入ってきません。

作者がジョンに共感すると言うとき、マンチェスターでの労働者の生活、人々の思い、憤りなどが描かれなければ共感は成り立ちません。ジョンに対するギaskellの関心そのものがすでにこの作品を成立させていると言えましょう。

マンチェスターの労働者ジョンは最初から「犠牲者」として描かれています。この点は注目してよいでしょう。妻のメアリ・バートンには美貌の妹のエスターがおります。労働階級のエスターは中産階級の紳士と恋仲になり、この男性と結婚することで上流階級の生活に入ることが出来ると信じています。そしてエスターはジョン・バートン夫妻のもとから姿を消します。妹の身の上を案じているメアリは気が晴れないまま、出産を迎え亡くなってしまいます。第3章で作者は「妻の死によってジョン・バートンに対する優しい影響力がなくなった」と語ります。マンチェスターでは厳しい条件が労働者を取り巻いています。

ジョン・バートンは聖書の教えを信じ、仲間の不幸に心を痛める誠実な労働者です。ジョン・バートンの目を通して読者が見るダブンポート一家の悲惨な生活、工場主たちは労働者のお陰で富を積んでいるのに労働者の悲惨な生活に対しては無理解、無関心。それに対してジョンは「工場主たちを神が作り給うた兄弟とは思いたくない」と憤ります。ジョンはチャーティストの請願団の一員となり、真実を訴えれば議会は分かってくれるだろうと希望をつなぎますが、しかし全て効果がありませんでした。ジョンは絶望するしかありません。

不況になるとジョンは労働組合員だという理由から、工場に採用されません。あるときハリー・カーソン親子を含む工場主たちとジョン・バートンを含む労働者たちとの団体交渉が行われます。労働者たちの要求をはねつけた工場主たちは、さらに労働者ジョン・スレーターをからかった戯画を描いていたことが判明します。

怒りに燃えた労働組合側は報復としてハリー・カーソンの息子、ハリーを暗殺する決定をします。その暗殺の役割がジョン・バートンにあたったのでした。息子を殺された工場主カーソンはこれが労働組合の仕業だとは思っていません。暗殺の疑いはその結果として若い労働者ジェムズ・ウィルソンにかけられます。若くて美しい娘、メアリ・バートンを巡っての工場主の息子ハリー・カーソンと労働者ジェムズ・ウィルソンとの三角関係による争いの結果としての暗殺と思われるからです。

労働組合側による暗殺は労働争議の手段としても意味を持ちません。暗殺を行ったという事実とその意図を労働組合側は公表していませんから、暗殺そのものが工場主たちにとって何の脅威ともなりません。工場主ハリー・カーソンは息子を暗殺したのは労働組合のジョン・バートンではなくて、若いジェムズ・ウィルソンだと信じていたことが作品の中であきらかにされています。

しかしこの労働組合によるハリー・カーソン暗殺は『メアリ・バートン』にとっては絶対に必要な仕掛けなのです。労働者ジョン・バートンが悲惨な生活に直面し、その解決の方法が見出せないままに絶望に陥るのに、工場主のほうは富を築き安楽な生活が可能だというのに労働者の困窮には一向に理解を示そうとはしませんでした。

ハリー・カーソンの暗殺は不幸な出来事であり、殺した側のジョン・バートンも息子を殺された父親ハリー・カーソンも苦しみます。この双方の苦しみを通してこそ労働者と工場主が相手を互いに理解し、許しを請う関係が成立するのです。

『メアリ・バートン』にあっては、マンチェスターの労働者の悲惨な生活の描写と労働者たちの憤りと報復の手段としての暗殺、暗殺を通じての工場主カーソンと労働者ジョンの相互の理解と和解が中核をなしています。この作品では作者ギャスケルの意図が最初から明確にあり、意図に沿う形で作品が展開されているかのようです。もしこの読み方が妥当だとすれば、労働者ジョン・バートンは聖

書の教えを信じる誠実な人間であったから、状況から追い詰められ、また忠実に組合の方針に従って暗殺を実行しましたが、ついには許されるべき人物、犠牲者として描き出されていることになります。

作者にとっては『メアリ・バートン』には不都合な点があります。それは物語を「私」の責任で語った結果です。作品の中に「私が」という表現が 60 回ちかくも現れています。このことは労働者ジョン・バートンが目にする生活の悲惨さ、憤りに作者ギャスケルも共感しているということになるでしょう。そこで作者は早々と第 3 章で弁解しています、「私が印象付けたいと願うのは労働者が感じて、考えていることなのです」と。この作者の弁解は作品の構成から言えば巧みな方法とは言えないでしょう。

しかし指摘されるこのよう作品の不備をもって『メアリ・バートン』の評価を低めるべきでしょうか。否です。エリザベス・ギャスケルが工業都市マンチェスターに住む労働者たちの悲惨な生活と彼らのまともな要求に共感を示し、それを迫真的に描き出し、その状況の出口を模索したことこそ輝やかな業績とすべきではないでしょうか。

(ハ)『ハムレット』について

T.S. エリオットの指摘 (*HAMLET* 1919) を俟つまでもなく、シェイクスピアの『ハムレット』には幾つもの欠点があります。例えば 1 幕 1 場の 60 行以下、亡霊の姿がハムレット王に似ていたかと問うマーセラスにホレイショウは答えて言います。

「あなたがご自身に似ているようにね。ハムレット王が野望に燃えたノルウェイ王と一騎打ちをなさったときに着用しておられた甲冑もまさに同じものでした。談判で怒って、ハムレット王がそりに乗ったポーランド軍を氷の上で打ちのめしたとき、同じようなしかめ面をなさった。奇妙なものです」

後の 5 幕 1 場 160 行では、ハムレット王がノルウェイ王と戦ったのは 30 年前、ハムレット王子が誕生した年と語られています。ホレイショウはハムレット王とノルウェイ王との一騎打ちの場面をまるで見たかのように語りますが、しかし想定されるホレイショウの年齢からみても、彼の置かれた立場からみても、一騎打ちの現場に居合わせたとは思われません。ここは話の辻褄が合いません。

もう1つだけ5幕1場の墓堀とハムレットのやり取りを考えてみましょう。このやり取りからすると、王子ハムレットは現在30歳ということになります。ハムレットはもっと若い青年だったと思って読み進んできたのは間違いだったということでしょうか。ハムレットが30歳だとすると母親ガートルードの年齢は47,8歳になるでしょう。女性の魅力は年齢には関係ないとしても、ガートルードがクローディアスの心を取りこにして再婚にいたるという作品の雰囲気は修正されずには済まないでしょう。

T.S. エリオットが、『ハムレット』は「芸術作品としては失敗であるのはたしかである」と語っているのにたいして、ドーヴァー・ウィルソンはその著 (*What Happens in HAMLET* 1967 Reprinted) で、『ハムレット』を小説と同列に考えてはいけないのであって、芝居には出来事の説明を行う役割が必要なのだと主張して、ホレイシヨの役割としての彼の言葉を正当化しています。

1幕2場(129行)で、戴冠式を済ませたクローディアスに対面したハムレットはその後次のような苦悩に満ちた言葉を吐きます。この時点ではハムレットは父王ハムレットの亡霊とまだ対話はしていません。

Hamlet O that too too sullied flesh would melt,/Thaw and resolve itself into a dew,...(ああ、このあまりにも、あまりにも穢れた肉体よ、溶けて、流れて、分解して、露になってしまえばいいものを…)

この *sullied* という言葉は、*Quarto 2* によるものだと いわれます。テキスト *Folio1* では *solid* となるのだそうです。この2つの違いには実に大きいはずです。2,3の日本語訳からこれを見ることにします。

松岡和子訳『ハムレット』(ちくま文庫 1996年)は *Folio1* の *solid* を採用して、「ハムレットが自分の体を『汚れている』と感じる理由はない。自分の体が溶けて露と消えて欲しいと思っていることが要なので、・・・」と述べています。松岡和子訳ではこの箇所には気に留めていないようです。

野島秀勝訳『ハムレット』(岩波文庫 2002年)はテキストとして *Quarto 2* を採用して、補注で詳しく述べています。しかしこの台詞がガートルードの近親相姦または不倫にたいするハムレットの疑惑と関係があるのかどうかには言及していません。

Kenkyusha British & American Classics の市川三喜注訳の *HAMLET*(1952年)

の NOTES には、「次の ”solid” は ”sullied” とするのが適当のように考えられる。母の非行によって自分の体まで汚されたのである」と記されている。しかし「母の非行」とは義理の弟との再婚（近親結婚）を指すのか、それとも不倫を指すのかは明確にはしていません。

この部分は『ハムレット』全体の解釈にかかわる重要な部分なのです。ハムレットの苦悩は自分の肉体は母親から受け継いでいるのだから母親の肉体が穢れているのであれば、自分の肉体も穢れているという気持ちから生じるのではないのでしょうか。

ドーヴァー・ウィルソンは *What Happens in HAMLET* の中でいとも淡々と語ります、「ハムレットは母親がその頃でさえも、父の存命中も、父に不実であり、ゴミをあさろうと天の臥所からこっそりと抜け出したものだということに気づくのである」と。

ガートルードの「不倫」はいかなる所でも明白に語られることはありません。王ハムレットの存命中に、ガートルードがクローディアス不倫関係にあったことを語るのには『ハムレット』にとっては禁物であるらしいのです。証明不能のまま、疑惑に包まれたままに置かれるハムレットの苦悩は大きいものです。母と伯父との不倫の疑惑に苦しめられているのに、その根源は明確に前面に出てはいけません。『ハムレット』は奇妙な作品と言うべきです。

しかし大切な点は『ハムレット』に内在する欠陥にあるということではありません。たとえ欠陥があるとしても、『ハムレット』が今日私たちの心を打つのはなぜか、という問いこそが大切であると言えます。

ハムレットは自分が選んだわけでもないのに、気がついてみたらある状況に立たせられています。しかもこの状況には誰ひとり疑念を抱いていないらしいのです。この状況とは簡単に言えば、エルシノア宮殿、ひいてはデンマーク王国の腐敗です。ハムレット王の后と王の弟が不倫関係にあり、王が謀殺され、王を謀殺した弟が王位についているのに、その事態に王子ハムレット以外は誰も疑問を抱いてはいないらしいのです。

ホレイションは別ですが、かつての学友たちもハムレットの胸のうちを分かっはくれません。それどころが王クローディアスの意に従ってハムレットの心中を探ろうとします。世も人心も腐敗しているのです。ハムレットはこの状況を正

そうとしますが、その方法と手段が見出せません。そして最後にクローディアスの計略にはまり倒れてゆくのです。

2幕2場(303行以下)でハムレットは人間の持つ素晴らしさ、その可能性を語っています。「人間はなんという傑作か、理性は高貴で、能力と姿と動きは限りがなく、動きは正確で敏速で、悟性はまるで天使のよう、まるで神のようだ、この世の美、生き物の手本」と。しかしこの後に続く言葉は、「だがぼくにとっては塵の塵など何だというのだ」です。

ここには人間の素晴らしい可能性を見ているハムレットの姿と醜い現実に絶望しているハムレットの姿とがあります。ハムレットの苦しみには果たして解決策があるのでしょうか。しかしこの作品に共感した読者は、似たような事態に直面したときそれに対応する何らかの覚悟が生まれているということにならないでしょうか。

3 作品から汲み取るもの

文学研究の方法とは文学作品をいかに読むかということと離れて存在するもののでしょうか。またある特定の方法を身につければ文学作品はよりよく理解できるのでしょうか。理解できるとしてもその方法に合わない部分はどうしますか。無視しますか、切り捨てますか。

文学作品は自分が読めるようにしか読めない、また読まないという言葉を出します。それぞれに異なる読者が同じ作品を読んでも対話が成りたち、共通の評価に達することが可能だと信じています。それは作品の後ろに人生というものがあり、論じているのは作品だが実は人生を論じているからではないのでしょうか。

『嵐が丘』を読むにはヒースクリフの憤り、恨み、反抗の気持ちなどを理解しないといけけないのではないのでしょうか。理解するとはヒースクリフの冷酷で無情な行動に賛成することとは違います。なぜヒースクリフがそのような行動に出るのかを知ることです。その点では、カラー・ベル(シャーロット・ブロンテ)が「『嵐が丘』新版への編集者の序文 1850」の中で述べている言葉、「ヒースクリフのような人物を創造することが正しいのか、または好ましいのか私には分からない。正しい、好ましいとはとても思えない」としているのは『嵐が丘』を正当に評価した言葉だとは私には思えません。ヒースクリフは19世紀イギリス社会の中心

を占める価値観、人間を財産、地位などで評価する価値観に反抗します。しかし反抗の手段が適切でないため自滅してゆく人間として描かれているのではないのでしょうか。ヒースクリフの取った手段は別としても、自己の存在を主張して反抗する意味までを無意味とするのは、作品の読み方として妥当ではないと思います。

『メアリ・バートン』のジョンの反抗についても同じようなことが言えましょう。ジョンたちの憤りを表す手段としての暗殺は荒唐無稽なものです。しかし人間としての欲求を持ち、その憤りを表現する手段として、ほかに有効な手段があったのでしょうか。ないときには人は黙って耐え忍ぶべきなのでしょう。

『ハムレット』が世界文学の古典だと称するとき、その意味は何でしょうか。無数の答えが可能でしょう。大切なことはなぜハムレットが苦しみ悩むかを探るとではないのでしょうか。世の腐敗を目にして、憤り正そうとするもののハムレットにも有効な手立てが見つかっていないのではないか。私はツルゲーネフの論(『ハムレットとドン キホーテ』岩波文庫 1955)に同調する気持ちにはなれません。

イギリス文学には人々の不幸に共感し、世の不合理を憎み憤る気持ちが溢れています。若いときに私はそれを読み取ることができず、英文学に対してある物足りなさを感じ悩んだのはなぜだろうか。それを語るには更に数時間が必要となります。従って今日はこれまでにさせていただきます。ご静聴まことに有難うございました。

[これは日本ギヤスケル協会第 22 回例会 (2010 年 6 月 5 日)での講演をもとにして原稿にしたものです]

(日本ギヤスケル協会前副会長 慶應義塾大学名誉教授)

Abstract

In Quest of How English Novels Should Be Read

Hidemitsu Tohgo

I] Despite the title of the speech, I will discuss *Wuthering Heights*, *Mary Barton* and *Hamlet* briefly, through which I would like to address some relevant points.

(i) *Wuthering Heights*

The unfairness of Nelly as narrator, the contradiction latent in love and marriage, and the failure of Heathcliff's revenge are never to be ignored. However, S. Maugham and Q. D. Leavis ignore these vital points.

(ii) *Mary Barton*

The hero of *Mary Barton* is not Mary Barton, but John Barton. Because of the poverty and misery found around him, John Barton, pious yet uneducated, resorts to assassination, which fails to solve the situation. Full of humane indignation, knowing no proper solution, John Barton falls prey to his passion.

(iii) *Hamlet*

Hamlet is not a novel, but many people read *Hamlet* instead of watching it played on the stage. It is true *Hamlet* has some defects, but the point is what makes the prince Hamlet so miserable. Convinced of the splendor of human beings, he sees corruption all around him. Trying to correct the situation, he seeks solutions. Trapped in Claudius's plot, Hamlet falls, unable to find the proper means.

II] Is there any definite way you do justice to the works of literature? The way to enjoy literature can never be reduced to some formula; it is the sum total of how you live. By enjoying a work of literature you change your view, and by the renewed outlook you can hope to enjoy other works of literature to the full.